東日本大震災後の被災写真返却活動に関する一考察

宮前　良平

世界的に災害が多発している昨今において、われわれは、災害からの復興をどのように捉えていけばよいだろうか。本研究では、まず、国内外の災害研究を概観することで、災害研究において復興研究が中心的に扱われていない現状を確認し、その原因として復興とは何かについてほとんど答えられていないことを挙げる。そこで本研究では、〈復興〉を一般的に言われている復興の〈暴力〉性に気づいていく過程として定位し、東日本大震災における復興の〈暴力〉性を問い直す研究群を概観する。そして、これまでの災害研究においてたびたび指摘されてきた災害の記憶の風化を復興の〈暴力〉性の具体的なテーマとして挙げ、〈復興〉を考察する鍵となることを指摘する。風化とは、記憶に関する問題であることから、国内外の主な記憶研究を概観する。そして、記憶とは、想起の内容を解釈するために事後的に措定されたものであること、想起には、集合体の規範の生成作用があることを指摘する。東日本大震災からの復興過程において想起を誘発させようとする活動の中で、本研究では、被災写真返却活動に注目する。被災写真返却活動に関する研究には、写真の修復に関する研究、返却ボランティアに関する研究、返却される被災者に関する研究の 3 点が考えられるが、被災者に主眼を置いた研究がいまだ為されていないことを指摘し、本研究の目的が、被災写真返却を通じて〈復興〉が達成されることを明らかにすることにあることを述べる。

本研究は、東日本大震災の被災地の一つである岩手県九戸郡野田村（以下、野田村）で震災直後から活動を続けている「チーム北リアス写真班」を主な対象とする。「チーム北リアス写真班」とは、野田村で月に一回、被災写真返却活動をおこなっている団体である。まず、主に青森県八戸市からのボランティアによって運営されており、お茶やお茶菓子を楽しみながら写真を見て被災者が思い出話を語る場を提供している。「チーム北リアス写真班」がおこなう被災写真返却活動は、「写真返却お茶会」と被災者から呼ばれ親しまれている。筆者は、2014 年 2 月から 1 年 10 か月にわたって「写真返却お茶会」にボランティアの一人として参加し、フィールドワークを続けている。参加回数は計 15 回に上り、「写真返却お茶会」以外に野田村に訪れた回数も含めると計 30 回（平均滞在日数 4.9 日間）に上った。また、他地域での被災写真返却活動と比較するために岩手県陸前高田市で活動している「陸前高田思い出の品」に視察に行った。本研究は、方法論的枠組みとしてアクションリサーチを採用し、フィールドワークで得られたデータをエスノグラフィとしてまとめた。

エスノグラフィとして、被災者の視点を意識して書かれた 7 編とボランティアの視点を意識して書かれた 5 編を紹介した。被災者の視点を意識して書いたエスノグラフィには、写真を喪失したことを嘆くというよりも、写真を見て思い出話が語られなくなっていくことを嘆く被災者の姿が描かれ、普段は意識しないような些細な日常を写真を見て思い出したことを喜ぶ被災者の姿が描かれた。ボランティアの視点を意識して書かれたエスノグラフィには、被災写真返却活動の目標として「一枚でも多く」と「最後の一枚まで」の 2 種類の語りがあることが示された。

エスノグラフィの内容を考察するにあたって、まず、被災者の視点から被災者が復興過程において何を失ったのか、もしくは、何を失いつつあるのかについて、「第 1 の喪失」と「第 2 の喪失」という枠組みを用いて明らかにし、「集合的記憶」と「非意図的想起」を用いて第 2 の喪失を乗り越えるための方略を明らかにした。「第 2 の喪失」とは、写真を失うという第 1 の喪失とは異なり、写真の存在さえ忘れてしまい、過去を思い出すことや過去のなにげない日常を物語ることがなくなってしまった状況を指す（表 1 参照）。次に、

被災写真返却活動においてその失われたものがどのように返却されているのかを「一枚でも多く」という目標と「最後の一枚まで」という語りから明らかにした。このとき、「一枚でも多く」を「めざす」かかわりに対応させ、「最後の一枚まで」を「すごす」かかわりに対応させながら論じた。「すごす」かかわりとは、写真を返すだけでなく、写真を介して思い出を返すことに焦点を当てており、たとえ写真が返却できなくても、その場で思い出話を交わせるような関係である。先ほど述べた第 2 の喪失に対抗するには、写真を介したコミュニケーションを重視する「すごす」かかわりが有用であると考えられる（表 2 参照）。最後に、被災写真返却活動や、被災写真を媒介とする想起がなぜ〈復興〉につながっているのかを「なにげなさの恢復」という視点から考察した。「なにげなさの恢復」とは、震災を機に新たな価値を創造するという創造的復興ではなく、むしろ震災前のなにげない日常を取り戻していくという考え方である。本章で用いられる「第 2 の喪失」「めざす／すごす」「なにげなさの恢復」の 3 つの概念はそれぞれ、被災者が何を失ったのか、それをどのように取り返していくのか、その取り返すことがどのように〈復興〉につながっていくのかを考察するための道具となった。

最後に、本研究の展望として、「第 2 の喪失」に向かう〈暴力〉に対抗するために「すごす」かかわりを基盤に置いた「なにげなさの恢復」が死者との共生という理念に向かっていくことを述べる。そして、死者との共生は、東日本大震災からの復興過程における〈暴力〉を回避する手段として有用であると考えられる。（減災人間科学）

表 1 第 1 の喪失と第 2 の喪失

	第 1 の喪失 ＝存在の物理的な喪失	第 2 の喪失 ＝記憶の痕跡の喪失，第 1 の喪失の喪失，物語りの喪失
A さん B さん	写真が流されること	写真の存在さえ忘れてしまうこと
C さん	家族を亡くすこと	遺影を失うことで、亡くなったことさえ忘れてしまうこと

表 2 「一枚でも多く」と「最後の一枚まで」

「一枚でも多く」	「最後の一枚まで」
細分化された目標を志向	無限遠にある目標を志向
写真返却という結果を重視	写真返却に至る過程を重視
所与としての写真の返却	意味としての写真の返却
「めざす」かかわり	「すごす」かかわり
第一の喪失に対応	第二の喪失に対応